「日本保守党」の誕生に思う

23.10.8　守山裕次郎

１．新党立ち上げの経緯

この度「日本保守党」が誕生した。ミリオンセラー作家の百田尚樹氏とジャーナリスト有本香氏が、安倍元総理亡き後の自民党の体たらくに呆れ果て、「やむにやまれぬ大和魂」の心境で、新たな政党「日本保守党」を立ち上げたそうである。

二人の見解によれば、安倍さんが健在だった１年余り前まで、自民党は曲がりなりにも「保守の体裁だけ」保っていた。だが安倍さんが亡くなった途端、「偽装保守」の化けの皮が剥がれ、本質が露呈してしまったとの見方だが、この見解に全面的に同意したい。

自民党がリベラル化した事例は過去にも様々あるが、二人の「堪忍袋の緒」が完全に切れたのは先の「LGBT 法案」成立だった。安倍さんはこの法案が、日本社会に甚大な悪影響を及ぼす危険性を知り、岸田氏に強い反対の意志を生前伝えていた。

これを踏まえ岸田氏は党首討論会で、全野党が賛成する中、法案化に明確に反対した。だが安倍さんが亡くなった途端に彼はそれまでの態度を一変させ、党内で反対多数だった法案の成立に向け、逆に自ら積極的に指示し強行成立させた。これに怒ったのが百田氏、有本氏で、「やむにやまれぬ大和魂」の心境に至ったそうである。この法案が日本の良き伝統、文化、国民性を根底から破壊する危険のある悪法であることは間違いない。

法案の危険性について、地上波等のマスメディアが伝えないため、隠れた問題が何かについて、多くの国民は十分理解していない。もしかしたら岸田総理自身、あるいは自民党の推進派議員連中も、その危険性について理解していない可能性さえある。

それにしても許せないのは、安倍さんが健在時、法案への反対を党首討論会で表明した岸田氏が、安倍さん亡き後に態度を一変させ、積極推進に寝返ったことである。加えて、生前安倍さんを慕い、保守派代表と言われた稲田朋美、新藤義孝、古屋圭司の３議員など、安倍さんの遺志を完全に無視して岸田総理の指示に従い、法案成立のため積極的に働いたことを忘れてはならない。（新藤氏はその論功行賞で、今回の改造人事で入閣した）

このように、岸田総理は方針転換理由を国民に何ら説明もせず、自分は陰に回って先の３議員を含む連中に任せ知らん顔、こんな人物が総理の自民党は許せない！！との百田氏、有本氏の怒りは真っ当である。（米国から岸田氏に、法案成立圧力があったようである）

この新党の立ち上げは二人にとって「全く想定外」だった。だが極端にリベラル化した自民党を看過できず、今回の決断に至ったそうである。世論調査では岸田政権の支持率は低下傾向にあり、原因はマイナンバーカードの混乱にあると一般には報道されていた。
だが現実は「LGBT 法案」への自民党支持者の離反が主因と思われ、それが事実なら事は重大だが、岸田氏、自民党にその危機感はなく「空気が読めない典型例」のようである。

安倍さんが健在だった昨年まで、自民党の「岩盤支持者」の一人だった私だが、今後は自民党支持を止め、新たに発足した「日本保守党」に期待し、積極的に応援していきたい。

２．岸田総理を含む自民党の問題点

１）９月改造人事

・超親中の林外務、超リベラルの浜田防衛の二人を遅まきながら退任させたのは良いが、中国による台湾への侵攻危機が叫ばれる中、そもそもこの二人を選んだのが大失敗！！

・その他主要閣僚は留任、それ以外は「在庫一掃内閣」、すべては来年の自民党総裁選で再任されるのが目的で、国家国民のことなど岸田氏の眼中にない。

・その１例が河野デジタル相の再任である。風力発電に関わる収賄罪で、秋本議員が逮捕された。その親分が河野氏で、秋本が国会で利益誘導質問した際、「素晴らしい！」とツイッターで高く評価したのが河野氏。だがその彼を敢えて再任したのも自分のため。

・小渕優子氏を選対委員長に抜擢したが、「ドリル優子」を思い出した人もいるだろう。彼女はかつて数億円もの事務所経費の不正が判明、秘書二人が有罪になった。この時、証拠隠滅のためドリルでハードディスクを破壊、この通称名をもらい話題となった。

※まだまだ改造人事への突っ込みどころは多いのだが、キリがないのでその他は割愛。

２）対米関係

・安倍さんはトランプ大統領からの絶大な信頼を得た。加えて、単に日米関係だけでなく、インド洋～太平洋を俯瞰する戦略外交と防衛戦略を立案、多くの西側諸国からも大きな信頼を得た。この実績は我が国戦後外交における最大の成果と言って過言でない。

・一方、岸田総理はバイデン大統領に言われるがまま。問題の「LGBT 法案」もバイデン大統領の「指示」、エマニエル米国大使の「厳命」を諾々と受けてのものだった。まるで戦後統治したマッカーサーが、80 年近く経ちエマニエルに交代したかのようで、いまだに「属国扱い」されて恥じない岸田総理は最低である。だが、そんな自覚さえないのが彼自身と自民党であり、事態は極めて深刻である。

・安倍さんは生前、林芳正氏だけは外相にしてはならないと岸田総理にアドバイスした。米国との関係悪化を心配しての助言だったが、それを無視して彼を外相に任命した。林氏はかつて「日中友好議連」会長だったが、今日、米国最大の敵はロシア（かつてのソ連）に代わり中国である。その中国とズブズブの関係の林芳正氏（別名：ﾘﾝﾎｳｾｲ）を外務大臣に任命したことに米国は激怒、しばらく日米首脳会談さえ開かれない異常事態が続いた。この米国の怒りに懲りて、今度は「属国扱い」で悪法成立に向けて内政干渉されても抗議もせず、諾々とそれに従う我が国は果たして独立国と言えるだろうか？

３）対中関係

・超親中で有名だった林氏を外務大臣に任命して米国の逆鱗に触れた。米国は中国に対し、半導体等のハイテク製品その他貿易品に対し、近年厳しい規制をかけるようになった。一方で米国と同盟を結ぶ我が国だが、台湾・尖閣有事への危機感は余りにも乏しい。

・そもそも中国がここまでモンスター化した責任は米国にあるが、我が国にも同等かそれ以上の責任がある。遅まきながら米国はそれに気づき、中国を敵と認めるようになった。一方で我が国にその危機感が乏しいのは、永らくの「極楽トンボの平和呆け」にある。

・安倍さんは生前「台湾有事は我が国有事」と語っていた。習近平は台湾、尖閣について「中国の核心的利益」と言明しており、軍事力の使用も排除しない考えである。ロシアによるウクライナ侵略を見れば判るが、「専守防衛」とは自国内だけがボコボコに破壊されることを意味し、相手国には何らの抑止力にもならないことが証明された。
・中国はロシアと並ぶ「ヤクザ国家」で、南シナ海周辺諸国や我が国にとって大きな脅威である。だが林前外相だけでなく、与野党を問わず「親中派、媚中派」がウヨウヨしているのが現状で、彼らを翻意させるためには選挙で厳しい結果を与えるしかない。

３.「日本保守党」への期待

１）天下の悪法「LGBT 法案」の成立をきっかけに「日本保守党」が発足した。だがこれ以外でもエネルギー政策、外国人労働者問題等、自民党の政策には大きな問題がある。
・再生可能エネルギーへの転換：太陽光や風力で安価で安定したエネルギー確保は無理。自然破壊を伴う不安定なメガソーラー発電に頼らず、原発再稼働を急ぐべきである。
・移民政策：欧米の現状を見れば判るが、移民、難民で大混乱になっている。この海外の事例を参考に、外国人労働者の受け入れは慎重の上にも慎重な対応が必要である。

２）現在の自民党議員の大半は評価できない。一方で、野党議員は更に「論外」である。加えてマスメディアが体たらくを助長させており、歴史を勉強もせず、何より重要な「国家観」を持たない議員が余りに多い。残念ながら岸田総理もその一人で、安倍さん亡き後、有能な人材がいないのが最大の悲劇である。（強いて言えば、高市氏くらいか）

３）百田氏の代表作品に「永遠のゼロ」がある。この作品のテーマは先祖から命を受けた自分がいて、それをしっかり次世代に繋ぐことが「人生の意義」との考えである。
人生は「エンドレスの駅伝」の一区間に例えることができる。一人で完結するマラソンと異なり、駅伝はタスキを繋ぐことに意味がある。遠い祖先から脈々と繋がれてきた貴重なタスキである。これを次世代にしっかり渡し、日本に生まれたことに感謝して、更に「その次の世代への礎」になることが「残り僅かな人生の意味」ではなかろうか。

４）百田氏と有本氏はUチューブでの２時間番組「＃あさ８」を開設している。（月～金）この番組を毎日視聴しているが、地上波では触れない話題が多く、大変参考になる。

５）「日本保守党」がどこまで伸びるか全く未知数である。だが「座して死を待つ」ことは許されない。国会議員を含め「今だけ、金だけ、自分だけ」の人間が余りにも多すぎる。腐りきった自民党に絶望し、新党を立ち上げた党首の百田氏、優秀な事務局長の有本氏に大いに期待し、自分も微力ながら精一杯彼らを応援したい。

「閑話休題１」

小渕優子氏は「ドリル優子」で有名になったが、その他自民党議員の通称も紹介します。
・シェイシェイ茂木（茂木幹事長）：
彼が外相時代、来日した中国の王毅外相が記者会見の席で、尖閣（中国名：釣魚島）は中国領と言い放った。茂木氏はそれに全く反論せず、逆に中国語で「謝謝（ｼｪｲｼｪｲ）」と言って大顰蹙を買った。（国益のため、相手外相と喧嘩してでも・・との覚悟もなし）

・ニーハオ林（林前外相）：
外相になるまで「日中友好議員連盟」会長だった。だが、議員連盟とは名ばかりで、中国には民主的に選ばれた議員など存在しない。すべてが「一党独裁の共産党員」で、我々民主国家の議員とは全く違うことを強く認識し、対応しなければならない。
・エッフェル松川（松川るい）：
自民党女性局長として、地方の女性議員も含め数十人でフランス研修旅行に行った。その際エッフェル塔前でポーズをとった写真を SNS に投稿、観光旅行だったのかと多くの人々から顰蹙を買った。（娘も同行させ、大使館に一時預けたことも判明）
・おフランス今井（今井絵理子）：
松川議員と同じで、フランスへの「お遊び研修旅行」が露呈した。
・ブライダルまさこ（森まさこ）：
ブライダル業界から献金を受け、口利きして業界に貢献した。（少子化対策の一環との偽りの理由も述べ、更に印象を悪くした）
・レインボー稲田（稲田朋美）：
「LGBT 法案」推進のため、「ブライダルまさこ」や「エマニエル米国大使」らと共に、「７色の横断幕」を掲げてデモ行進した。
・デリバリー木原（木原誠二前官房副長官）：
週刊文春の記事（文春砲）によると、家族が留守の間にデリヘル嬢（と言っても 40 代から 50 代の熟女）を「宅配」してもらった。
・シャネル秋本（秋本真利）：
シャネルの高級腕時計を身につけ、河野太郎の指南？もあり、競走馬 10 頭を購入、再エネ議連事務局長の立場で不法献金を受け逮捕された。（河野太郎の罪も重い）
※中国の脅威その他難題が山積する中、この自民党の緊張感のなさは絶望的である。

「閑話休題２」

巨人が２年連続で４位となり、原監督が任期１年を残して辞任した。次期監督には阿部ヘッドコーチが就任するそうだが、来年もまた優勝は難しいと思われる。巨人の体質は自民党によく似ており、抜本的な改革が全くなされていない。
一方、MLB での大谷選手の活躍は実に見事だった。最後の方は肘と腹筋の負傷で欠場を余儀なくされたが、二刀流での活躍を毎日ワクワクしながら観戦することができた。
加えて、誰からも愛される明るいキャラクターが素晴らしい。来年は肘のリハビリで打者一本での戦いとなるが、オリックス山本投手のポスティングでの移籍も囁かれており、他の日本人メジャーリーガーの活躍も含め大いに期待したい。

以上